

現象学的存在論に基づく「誤信念課題」の再解釈

— 「心」の発達における《否定》の意味 —

福 田 学

はじめに

他者の「心」がわかるとはどういうことか、という問いは、誰にとっても一言で答えられるものではないだろう。だが、他者の「心」がある人にわかっているかどうかは検証可能であり、しかも、比較的簡素な実験によって、その可否を明確に線引きできるのではないか——少なからぬ心理学者がそう考えている。その者たちが依拠するのは、「誤信念課題 (false-belief task)」と呼ばれる実験方法である。

誤信念課題は、ハインツ・ヴィマーとジョゼフ・パーナーが、1983年の論文「信念についての信念 (Beliefs about beliefs)」で明らかにした実験方法である。その原型は、哲学者のダニエル・デネットが1978年に、やはり「信念についての信念」と題する文章の中で提示している。デネットのこの文章は、1978年に霊長類学者のデイヴィッド・プレマックとガイ・ウッドラフが発表した、「チンパンジーは心の理論をもつか?」、という論文に対するコメントとして書かれたものである。周知のように、「心の理論 (theory of mind)」は、1980年代から90年代にかけて発達心理学を席卷したテーマであり、現在でも活発にその研究がなされているが¹⁾、プレマックらの上記論文ではじめて提起された概念である。彼らは「心の理論」を、「自分自身および他者に、心の諸状態を帰属させること (impute mental states)」(Premack and Woodruff,1978,p.515)、と定義している。つまり、「…しよう」とか「…したい」とか「…と思う」といった他者の「心」の状態や作用を、他者の諸行動や諸表情などから自分の「心」を使って読み取っていくことが、「心の理論」

である。目に見える行動や表情の背後に目には見えない「心」を読み取る、といったことから、「理論」という言葉が用いられているが、「心の理論」とは、平たくいうなら「心の理解」のことである²⁾。プレマックらが提起した、「チンパンジーは心の理論をもつか」という問いに対し、「信念についての信念」をもっているかどうか試験することを提言したのがデネットであり (cf.,Dennett,1978,p.569)、この提言を受けて「誤信念課題」という実験方法を開発したのが、ヴィマーとパーナーなのである。誤信念課題は、「『心の理論』をもっているかどうかを検査するリトマス試験紙」(バロン-コーエン,2002,126頁; cf.,子安2000,97-98頁)、といわれることもあるように、被験者が他者の「心」を理解できているかどうかを明確に判別してくれるもの、とみなされている。

この課題が大きな注目を浴びているのは、ある人が他者の「心」をわかっているかどうかを調べられるなら、人間が他者の「心」をいつからわかるようになるのか、という問いにも答えられることになるからである。もちろん、全ての発達心理学者がこのことを認めているわけではない。それは、その根本にある「心の理論」研究が様々な批判を浴びていることから明らかである³⁾。しかし、誤信念課題に関しては、課題通過の年齢など発達の見地に立った夥しい研究がなされ、膨大な実験結果が蓄積されている。このことは、最初の課題が発表されてから20年足らずで、この課題に基づく多数の研究の実験結果を統合し、課題通過の年齢についての「メタアナリシス」が発表されていることにも示されている (cf.,Wellman et al.,2001)。

また、この課題は、発表の2年後には自閉症者の「心」の理解能力の調査にも応用され (cf.,Baron-Cohen et al.,1985)、その後自閉症研究の一パラダイムの形成に寄与することになった (cf.,Perner,1989;

Baron-Cohen,1989; Happé,1995; Frith and Happé 1999; バロン=コーエン, 2002; Senju,2009)。このことが典型となるように、誤信念課題は、発達心理学の一実験方法という位置づけに止まらず、「心」やその発達の謎に迫る重要な契機とみなされ、心理学や発達科学を超えた領域にまで影響を及ぼしている (cf., Zahavi and Parnas,2003)。

本論では、まず誤信念課題の「発展史」を概観し、課題が様々に改変されていくなかで、信念という心的状態の規定が曖昧なままにされていることを示す (Ⅰ)。その明確な規定のため、信念の特性を意識の観点から詳細に記述している現象学者ジャン=ポール=サルトルに従って信念について考察する (Ⅱ)。その考察に基づき誤信念課題を解釈し、心理学とは異なる視座から、この課題の意味と問題点を明らかにする (Ⅲ)。最終的には、「心」やその発達に関する研究にとって、「ない」や「非」という否定の観点が有用性をもつことを示したい。

I 誤信念課題の「発展史」

1 課題の内容と実験の結果

まずは、誤信念課題の具体的な内容を概観しよう。

誤信念課題の基本形は、主人公がある場所Aに入れておいた物が、主人公の知らない間に別の場所Bに移されるというストーリーを被験者に提示してから、主人公が後でその物をどこに探すかと問うものである。この問いにAと答えられれば、被験者は主人公の誤信念を理解しているとみなされる。

この課題は、ヴィマーらが考案した、マクシという少年を主人公とする課題を出発点に、様々な改変版が作られている。以下では、「マクシ課題」と、課題の中でも特に有名な「サリー・アン課題」の二つを、「標準的」誤信念課題として例示しておく。

①マクシ課題

この課題では、子どもたちに次のような話しを聞かせる。

「マクシは、買い物から帰ってきたお母さんが買って来た物を仕舞うお手伝いをしています。マクシはチョコレートを青い食器棚に入れます。彼はチョコレートが大好きなので、後で遊びから帰ったらそれを少し食べようと、それをどこに置いたか正確に覚えておきます。それから、彼は遊び場に出かけて行きます。彼がいなくなってから、お母さんはケーキ作りの準備をはじめ、チョコレートを青い棚

から取り出します。彼女は生地にチョコレートを少し削り入れ、ついでそれを青い棚ではなく、緑の棚に戻します。お母さんは、卵を買ったことに気づき、近所に出かけます。そこにマクシがお腹を空かせて遊び場から帰ってきました。彼はチョコレートを食べたいです。彼はチョコレートをどこに置いたか、まだちゃんと覚えています。」

以上の話しを聞かせる間、主人公を表す紙人形やチョコレートの玩具などを使用して、人物やチョコレートの移動を子どもたちに理解させる手助けとする。話しを聞かせた後、子どもたちに、「マクシがチョコレートを探すのはどこでしょう」と質問する。この質問に対し、青い棚を指摘できれば、マクシの誤信念を理解できている、とみなされることになる (cf., Wimmer and Perner,1983,pp107-109)。

ヴィマーらは、これを4歳児から9歳児までの被験者に行った。その結果には、「年齢による〔誤信念理解の正答率の〕はっきりとした違いが示されている。4歳から5歳児の大多数は、間違えて、物が実際に置かれている場所yを指摘したのに対し、ほとんど全ての6歳から9歳児は、正しい場所xを指摘したのである」 (ibid,pp108-110)。

②サリー・アン課題

この課題は、バロン=コーエンとアラン・レズリーとウタ・フリスが考案し、1985年の論文「自閉症児は『心の理論』をもつか?」で発表したものである。論文タイトルが示すように、元々は、自閉症者のためのテストとして作られたが、その後自閉症研究に限らず広く用いられるようになり、「サリー・アン課題」が誤信念課題の代名詞ともなっているほどである。内容はマクシ課題と基本的に同じであるが、かなり簡略化されている。

登場人物は、サリーとアンで、サリーはカゴを、アンは箱を持っている、という設定である。やはり人形を用いて、人物や物の移動を視覚的に示しながら、次のようなストーリーを子どもたちに提示する。

「サリーはビー玉を持っています。サリーはビー玉を自分のカゴに入れました。サリーは外に散歩に出かけました。アンは、サリーのビー玉をカゴから取り出すと、自分の箱に入れました。さて、サリーが帰ってきました。サリーは自分のビー玉で遊びたいと思いました。」

このストーリーを理解させた後に、「サリーがビー玉を探すのは、どこでしょう」と、子どもたちに質

問をする。この質問に、カゴを指摘できれば、サリーの誤信念を理解できている、とみなされることになる (cf., Baron-Cohen et al., 1985, pp.40-42; Frith and Happé, 1999, p.3)。

以上二つの課題に代表される物の移動を伴う誤信念課題は、「普通児」を対象に繰り返し実験が行われているが、明確かつ一貫した結果が確認されている。3歳未満の子どもたちは、実際に物が置かれている場所を答える。正答率は4歳から7歳にかけて上昇していき、6歳代には正答できる子どもが多数派となる。標準的誤信念課題の結果からすると、誤信念理解が開始されるのは4歳頃からである、とみられる (cf., Wellman et al., 2001)。

2 標準的誤信念課題の測定対象

以上のような内容の誤信念課題は、何を明らかにしようとしているのか。このことを、上述した、ヴィマーとパーナーによる1983年の論文と、バロン-コーエンらによる1985年の論文に即して明らかにしたい。

ヴィマーとパーナーは、誤信念課題の目的を、「被験者が真実だと知っていることとは異なる他者のはっきりと限定された (definite) 信念を表象する子どもの能力について調査すること」(Wimmer and Perner, 1983, p.106, 強調点は原文イタリック, 以下同様)、と規定している。従来、「他者における知識の欠如を表象する子どもたちの能力」は発達心理学の重要な検討課題とされてきたのに対し、他者の信念を表象する能力は「発達的には検討されてきていない」(ibid.)。このように、誤信念課題研究の出発点において、知識に関わる表象と、信念に関わる表象との違いが明示され、後者についての研究の必要性が訴えられている。

ヴィマーらは、他者の誤信念理解のためには、被験者が捉える信念が、「他者の信念の範囲内に制限されて (constrained) いなければならない」(ibid.)、ということを強調している。つまり、誤信念課題で問題となる信念は、被験者自身がいま自分の心のなかにもっている知識とは全く無関係であり、他者の「心」に限定された、他ならぬ他者の信念である、ということが被験者に明確に理解されていなければならない。具体的内容に即していえば、チョコレートが緑の戸棚にある、という知識とははっきりと区別して、主人公はチョコレートが青の戸棚にあると思っ

ている。そのためには、マクシはチョコレートが青の戸棚にあると思っ

ている、といった「他者の信念の表象が、しっかりと確立されていなければならない」(ibid.)、とヴィマーらは主張する。このことから導かれるが、誤信念課題は、いわゆるほんやりとした何となくの理解能力ではなく、「他者の間違っ

た信念についての明確 (explicit) かつ限定された表象を被験者たちがもっているかどうかをテストする手続き」(ibid.)である。一言でいえば、他者の誤信念を理解する「認知スキル (cognitive skill)」(ibid., p.126)の有無を測定するもの、と規定されている。後にみるが、パーナーは、以上の誤信念課題に通過するには、判断能力が必要ともみなしている。

このことから導かれるが、誤信念課題は、いわゆるほんやりとした何となくの理解能力ではなく、「他者の間違っ

た信念についての明確 (explicit) かつ限定された表象を被験者たちがもっているかどうかをテストする手続き」(ibid.)である。一言でいえば、他者の誤信念を理解する「認知スキル (cognitive skill)」(ibid., p.126)の有無を測定するもの、と規定されている。後にみるが、パーナーは、以上の誤信念課題に通過するには、判断能力が必要ともみなしている。以上のことを、ヴィマーとパーナーの論文タイトル「信念についての信念」を基に言い表せば、誤信念課題は、「他者の信念についての被験者の明確な信念」をテストしている、ということになる。誤信念課題に対するこの見方は、バロン-コーエンにも受け継がれている。バロン-コーエンらにも受け継がれている。バロン-コーエンらによる1985年の論文において、多くの自閉症児が誤信念課題を通過できないという実験結果を明らかにしている。この結果から、「自閉症児は、自分自身の知識と〔自閉症児にとって他者であるはずの〕人形の知識との違いを識別して (appreciate) いなかった、と結論されることになる」(Baron-Cohen et al., 1985, p.43)、としている。この論文でバロン-コーエンらは、「自閉症の被験者たちは、他者に信念を帰属させる (impute) ことができない」(ibid.)、と解釈しているため、ヴィマーとパーナーとは異なり、被験者の知識と他者の信念との区別ではなく、被験者の知識と他者の知識との区別を問題にしている⁴⁾。だが、知識であれ信念であれ、被験者自身の「心」に帰属するものと他者の「心」に帰属するものとははっきり区別することを誤信念課題通過の条件とみなしている、という点で、バロン-コーエンらは先のヴィマーとパーナーと同様である。

また、バロン-コーエンらは、誤信念理解は「認知能力 (cognitive abilities)」に基づくものであり、それができないことは「認知障害 (cognitive deficit)」である、としている (ibid., p.44)。また、自閉症児に行った誤信念課題の「研究結果は、……知覚のレベルで諸状況を理解することと、〔信念のような〕より高次の心的状態を〔他者に〕帰属させること (attribution) とが、〔人間の心的能力として〕決定的に異なっている、ということを示し

ている」(ibid., [] 内引用者, 以下同様), といったように, 信念理解を高次の認知能力に基づくものとみなしている。

以上のことからすると, 誤信念課題のスタンダードが確立された際, この課題は被験者の次のような能力を測定するものと規定されていたことになる。

1. 他者の信念を他者の「心」に帰属するものとして問題とすることができるか。
2. 信念についての明確な表象や認知が可能であるか。

ところが, 誤信念課題の内容が発展・変容していくにつれて, この規定は有効性を失っていった。しかも, そうなっていたのは, この規定の妥当性が再検討されることによってというよりも, 子どもたちが誤信念を理解しているにもかかわらず課題に失敗する可能性を排除するために, 様々な改変版が考案されていくにつれてであった。つまり, 誤信念課題のバリエーションの拡大は, 子どもの信念理解に関する原理的な検討を必ずしも伴っていないのである。I-3では, 誤信念課題の「発展史」を踏まえながら, この点について考察したい。

3 測定対象の変化

①自分自身の信念

誤信念課題のうち, 「サリー・アン課題」に匹敵するほど有名なものに, 「スマーティ課題」と呼ばれるものがある。この課題は, 誤信念課題の考案者パーナーを含む3人の研究者が1987年の論文ではじめて提起した, 以下のような内容のものである。

被験者の子どもに, スマーティというお菓子の箱を見せる。スマーティは, 英国の子どもであれば誰でも知っているお菓子である。実は実験者はそこに鉛筆を入れておいてあるのだが, 子どもに, 「この箱には何が入っていると思うかな?」と質問をする。子どもが, 「スマーティ」と答えると, 箱の中を見せ, そこには鉛筆が入っていることを示す。それから, 「あなたの次にこの部屋に入ってくる人は, この箱の中に何が入っていると思うかな?」と質問する。この答えに, 「スマーティ」と答えられれば, 子どもはその人の誤信念を理解しているものとみなされる, というわけである (cf. Perner et al., 1987, pp.132-133)。この課題に関しても, サリー・アン課題などと基本的に同様の結果が得られている (cf. Perner et al., 1987; Perner et al., 1989)。

このような内容の誤信念課題が考案されたのは, マキシ課題やサリー・アン課題を通過できないから

とあって, 子どもたちが主人公の誤信念を理解していないとは限らない, と考えられるようになったからである。マキシ課題やサリー・アン課題は, 「世界における予期していなかった変化から生じた誤信念を理解している」(Perner et al., 1989, p.690) かどうかを検査するものとして考案された。ところが, 「3歳児たちは, [課題におけるマキシやサリーという]主人公が, 出来事の通常の成り行きに対する常識的な予想 (common-sense expectation) を踏まえている, というストーリー上の暗黙の前提を理解できない」(Perner et al., 1987, p.126) ために, 課題に失敗している可能性が問題となった。マキシ課題やサリー・アン課題における「暗黙の予想とは, ある物がひとたびある場所に置かれたなら, それはそこにあり続けることが予想される, ということである」(ibid.)。もしも被験者の「3歳児たちが, 主人公がこの予想をもっているとは想定していないとしたら」(ibid.), つまり, チョコレートやビー玉は主人公が最初に置いたところにあり続けると主人公が予想していることを理解していないとしたら, 当然, 主人公が物を探すのは主人公自身がかつてそれを置いたところである, とは思わないことになる。そうすると, マキシ課題やサリー・アン課題は, 出来事の成り行きに対する他者の予想についての理解を測定しているのであって, 誤信念課題としては機能していない可能性があることになる。

この可能性は, 被験者である「子どもが, 他者に誤信念を帰属させなければならなくなる前に, 自分を誤らせる状況が自分自身のなかにどのように誤信念を作りあげるかを自ら体験している」(Perner et al., 1989, p.690) ことによって回避できる。こうした考えの基に設計されたのが, スマーティ課題である。スマーティ課題は, 上で説明したように, 「よく知られたヨーロッパのお菓子の箱 (「スマーティ」) の外観によって, その箱の中身に関してどのように誤らされたかを, 子どもたち自身がまずは体験する」(ibid., () 内原文, 以下同様) ことを特徴とする。これは, 被験者である子どもたちを, 彼らが後に誤信念を帰属させることを求められる他者と同じ体験に直面させることを意味する。このことによって, 出来事の成り行きに対する常識的な予想が, この場合であれば, スマーティの箱にはスマーティが入っているだろうという予想が, 被験者とその他者とで異ならなくなる, というわけである。

スマーティ課題に特有のこうした「仕掛け」の意

味については、後に検討する。ここで問題にしたのは、スマーティ課題が誤信念課題の規定に変化をもたらしていることである。I-2でみたように、誤信念課題は、他者の信念を明確に他者の信念として問題にできる能力を測定するものと規定されていた。このように規定されたのは、誤信念課題に失敗する子どもも、自分自身の信念は理解しているに違いない、とみなされていたからであろう。ところが、スマーティ課題に基づく実験は、この見方が誤っていることを示すことになった。

アリソン・ゴブニックとジャネット・アスティントン は、パーナーらによる上述論文の翌年の論文で、子ども自身の信念を問う質問がスマーティ課題において可能になった点をうまく利用した研究を行っている。3歳児のなかに、「自身の信念を自分に帰属させること (self-attribution)」ができない子どもがいることは、パーナーらの論文でも報告されていたが (cf., Perner et al., 1987, pp.133-134), ゴブニックらは、この点をより精緻に検証している。決め手となるのは、スマーティの箱の中身を見せた後に、「あなたがはじめて箱を見た時、私たちがそれを開ける前は、その中には何が入っているとあなたは思っていた？」(Gopnik and Astington 1988, p.29; Gopnik, 1993, p.7), と質問することである。ゴブニックらは三つの異なる実験課題でこの質問を子どもたちに与えたが、「三つ全てにおいて、結果のパターンは類似していた。すなわち、2分の1から3分の2の3歳児が、自分はもともと箱には鉛筆が入っていると思っていた、と答えたのである」(Gopnik, 1993, p.7)。これに加えて、ゴブニックらは、「誤信念を問う質問に答える子どもたちの能力に関し、自分自身の信念についての質問に答える能力は、他者の信念についての質問に答える能力と有意に相関している」(ibid.) ことも明らかにした。

先取的にいうと、以上の実験結果は「信念」というものの自体の全面的な捉え直しを我々に要求している。この点はIIで明らかにするとし、ここでは次のことを確認しておこう。他者の信念を問題にすることが、自分の信念を問題にすることと密接なつながりがあるとすれば、「信念についての信念」という定式は、当初想定されたような「他者の信念についての被験者の信念」を意味するだけではなく、「自分自身の信念についての被験者の信念」をも意味するはずである。誤信念課題の新バージョンに基づくゴブニックらの実験は、彼女らの研究目的を越

えて、このことを示すことになったのである。

②潜在的な理解

I-3-①で述べた問題以外にも、誤信念理解とは無関係な能力の不十分さから子どもが誤信念課題に失敗している可能性が問題となった。例えば、実験者の質問に自分の回答を的確に対応させる能力は、誤信念理解とは無関係と目されるが、その不十分さは課題の失敗要因となりうる。すると、4歳未満の子どもも、それらの能力の未発達ゆえに誤信念課題に失敗するのであって、実際には誤信念を理解している、という可能性が問われるべきことになる。

ウェンディ・クレメンツとパーナーは1994年に、標準的誤信念課題を以下のように改変した課題を基に、この問いに取り組んだ。舞台はネズミの巣、登場するのはサムとケーティーというネズミである。サムは食料のチーズを、舞台の端に置かれた青い箱に入れる。眠りにつくためにサムがトンネルを通過して舞台から立ち去った後、ケーティーが登場し、チーズをもう一方の端の赤い箱に動かす。ケーティーが立ち去った後、眼を覚ましてお腹を空かせたサムが再登場する。さて彼はどちらの箱を開けるだろうか、というのが子どもたちに与えられる質問である (cf., Clements and Perner, 1994, pp.381-384)。

2歳11ヶ月から4歳5ヶ月までの子どものうち、この質問に青い箱と正しく回答する子どもは、約45パーセントでしかない (cf., ibid., pp.388-390)。この結果は、子どもの誤信念理解に関して既に得られていた結論を裏付けている (cf., ibid., 390)。ところで、この改変版誤信念課題では、子どもたちはまず最初にどちらの箱に目を向けるかが記録された (cf., ibid., pp.381)。すると、2歳11ヶ月から4歳5ヶ月までの子どものうち、約90パーセントの子どもがまず最初に青い箱を見ていたのである。一方、2歳5ヶ月から2歳10ヶ月の子どもは、チーズが置かれている赤い箱を見ていた (cf., ibid., pp.384-390)。

クレメンツとパーナーは、「この実験結果は、潜在的な理解 (implicit understanding) が顕在的な理解 (explicit understanding) に大きく先行していることを実証し、潜在的な理解は、2歳11ヶ月頃に突如として始まることを示唆している」(ibid., p.390), とする。このようにクレメンツらは、質問を受けてまず正しい場所を見ることを「潜在的な理解」とし、これを言葉でもって正しく回答する「顕在的な理解」と対照させている (cf., ibid., p.388)。誤信念理解にこうした二区分を認めると、誤信念を理解し

ていないとみなされていた4歳未満の子どもに関しても、2歳11ヶ月以上の子どもは、顕在的には誤信念を理解できないために標準的誤信念課題には失敗するが、潜在的には誤信念を理解していることになる、というのがクレメンツとパーナーの主張である。この二区分は、「ある事実を表象すること (representing) と、その事実について判断をなすこと (making a judgment) との区別」とか、「判断的知識と、非判断的知識 (nonjudgmental knowledge) との違い」と言い換えられている (cf., ibid., p.392)。

I-4-②で論じるように、信念理解を知識とみなすことには大きな問題があるし、この問題の背景には、「見ること」を無造作に信念理解と関連づけてしまう問題もある。だがここでは、この研究が誤信念課題に関する当初の規定を成り立たなくさせていることを確認しておきたい。潜在的な理解という観点は、誤信念理解とは無関係な要因で課題に失敗する可能性を排除し、より幼い子どもにも誤信念理解がなされているかを明らかにするために導入されたのであった。だが、このことによって、誤信念の理解は、当初規定されていたような「信念についての明確な表象や認知」に限られるものではなくなった。クレメンツとパーナーのこの研究では、明確な表象は、単なる表象とは峻別される「判断をなすこと」と規定し直される一方、潜在的ないし非判断的理解も誤信念理解と認められることになったのである。

このことは、誤信念課題研究の出発点の定式「信念についての信念」の解釈に、さらなる変更を付加することになる。この定式は「自分および他者の信念についての被験者の明確な信念」を意味することをI-3-①で明らかにしたが、これに訂正と補足を施して、「自分および他者の信念についての、潜在的ないし非判断的理解に基づけられた被験者の信念」としなければならぬことになる。

③誤信念理解の開始年齢

I-1で述べたように、誤信念理解は、標準的誤信念課題では4歳前後から始まるのが通例とされたが、クレメンツとパーナーの改変版誤信念課題においては、3歳を少し下回る子どもによっても誤信念理解がなされる、と結論された。このような、潜在的理解を誤信念理解に含める研究の登場は、クレメンツとパーナーの結論に関わらず、誤信念理解はさらに幼い子どもにも認めうるのではないか、という

問いを刺激することになった。

この刺激を受けて登場した研究に、クリスティーン・オオニシとルネ・ベラージョンが2005年に『サイエンス』に発表した論文「15ヶ月児は誤信念を理解しているか?」、がある。この論文は、15ヶ月の乳児も誤信念を他者に帰属させているという結論によって、発達心理学界に大きな反響を引き起こした (cf., Southgate et al., 2007, p.587; 千住, 2012, 48頁)。

オオニシとベラージョンの研究も、誤信念理解能力以外の能力の不十分さによって課題遂行が阻害されないような状況設定に腐心している。被験者の言語反応に頼らないクレメンツとパーナーの改変版誤信念課題でも、設定場面の説明や質問には言語を使わざるをえなかったが、オオニシらの課題では、以下のように言語が一切用いられない。向かい合って置かれた緑色と黄色の二つの箱とその間にスライスしたスイカの玩具が置いてある舞台を前にした被験者の乳児たちに、舞台上の女性が、箱に玩具を隠したり、箱に自分の手を入れてじっとしている場面を見せる。この場面に十分に親しませた後に、乳児たちに次のような場面を見せる。黄色の箱にスイカが隠されるのを女性が見ている場面を見せた後、女性の見えていないところでスイカが反対側の緑色の箱に移される場面を見せる。その後、半数の被験者には、黄色の箱、すなわち、スイカが隠されるのを女性が見ていた箱にその女性が手を入れる場面を見せ、残り半数の被験者には、緑色の箱、すなわち、今実際にスイカが入っている箱に女性が手を入れるところを見せる。ここでポイントとなるのは、被験者の乳児が誤信念を理解しているのであれば、スイカが黄色の箱から緑色の箱へ移されるのを女性は見えていなかったのだから、彼女はスイカは黄色の箱にあるという誤信念に従って黄色の箱に手を入れる、と乳児は予期するはずである、ということである。そして、乳児は、自分の予期に反する場面を目にした際、予期したとおりの場面を見る場合に比べてそれをより長く見る性質をもつ、とされている。オオニシらはこの性質を利用した「期待背反法 (violation-expectation method)」(Onishi and Baillargeon, 2005, p.255) という手法をこの実験で活用する。つまり、上述の場面で女性が緑色の箱に手を入れる場面がもしも乳児の予期に反しているのなら、黄色の箱に手を入れる場面よりもそれを長く見るはずだ、というのがオオニシらの予測であり、この予測のとおりであれば、女性の誤信念に基づく予期を乳児が確かに行っていると結論できる

ことになる、というのがオオニシらの主張である (cf. *ibid.*, pp.255-257)。

実験の結果は、オオニシらの予測を裏付けるものであった。つまり、女性が緑色の箱に手を入れる場面を見せられた乳児たちは、黄色の箱に手を入れる場面を見せられた乳児たちよりも、場면을有意に長く見る、という結果になった (cf. *ibid.*, p.257)。

オオニシらは、乳児のこの反応が箱の色の違いに起因するのではないことを確かめるために、箱の色を変えて同じ実験を行っているが、その結果もオオニシらの予測を裏付けるものであった (cf. *ibid.*, pp.256-257)。またオオニシらは、乳児たちに、黄色の箱にスイカが隠されるのを女性が見ている場面を見せた後、今度は女性が見ているところでスイカが反対側の緑色の箱に移される場面を見せ、その後乳児を半数ずつに分けて、前者には黄色の、後者には緑色の箱に女性が手を入れる場面を見せる実験も行った。するとこの実験では、乳児たちは、女性が黄色の箱に手を入れる場面を、緑色の箱に手を入れる場面よりも有意に長く見る、という結果になった (cf. *ibid.*)。この結果は、スイカは緑色の箱に入っているという女性の「正しい信念 (true-belief)」 (*ibid.*, p.256) に基づく予期を乳児たちが行っていることを示している、とオオニシらはいう (cf. *ibid.*, p.257)。

これらの諸実験から、オオニシらは、スイカが黄色から緑色の箱に移されるのを女性が見ている場面を見る場合も、見ていない場合を見る場合も、乳児は女性の信念を理解している、と結論づけている (cf. *ibid.*, p.257)。

4 実験結果の解釈に関する問題

①信念理解は指し示しうるか

オオニシらのこの結論は、果して妥当なものであろうか。

オオニシらが開拓したこの誤信念課題と同様の方法に基づく別の実験でも同じような結果が得られていることから (cf. Southgate et al., 2007), この研究の方法論的妥当性は認められている、といえる。

一方、この実験結果は乳児の誤信念理解を示しているとは限らない、という反論が提起されている。例えばパーナーらは、2005年同号の『サイエンス』に掲載した論文で、オオニシらの実験における乳児の反応を、「連合記憶」によって説明できることを示している (cf. Perner and Ruffman, 2005, pp.214-216)。パーナーらのこの反論は、オオニシらが引き

出した乳児の反応を、誤信念理解とは別のより「単純」な仕方で解釈させてくれるため、オオニシらの研究に対する強力な反論とみなされている (cf. 千住, 2012, 51-52頁)。

だが、パーナーらのこの反論は、15ヶ月児は誤信念を理解しているとは限らないことを示しただけで、オオニシらの結論が誤りであることを論証するものではない。事実、実験デザインを変更するなら、パーナーらの反論は退けられ、オオニシらの結論の妥当性が示されると主張する研究もある (cf. Senju et al., 2011)。パーナーらは、この研究の実験結果についても、その主張とは異なる仕方で解釈することが可能かもしれない。だが、たとえそうであったとしても、15ヶ月児が誤信念を理解していないこと自体を示すのは、恐らく不可能であろう。オオニシらとパーナーらとは、誤信念理解の下限年齢については対立しているが、以下述べるような研究上の問題を共に抱えている。そのため、誤信念理解の開始年齢を決定する論争は、原理的に決着しえない。

オオニシとベラージョンの研究は、子どもは最初に「正しい」場所を見ていたので潜在的には誤信念を理解しているとみなすクレメンツとパーナーの研究の延長上になされている (cf. Onishi and Baillargeon, 2005, p.255)。つまり、両研究とも、子どもが事象を「見る」ことないし「長く見る」ことが、その子どもの信念理解を指し示している、とみなしている。

ある場所を見るのが、なぜ誤信念理解を指し示しているとみなせるのか、という問題に、クレメンツとパーナーは全く論及していない。彼らにとっては、被験者がある場所を「正しく」見ているという事実は、誤信念課題にいわば目で見えるレベルでは正答していることを意味し、したがって何らかの仕方では誤信念を理解していることも意味していると解釈するのが、論証の必要もないほど自明なことであったのだろう。

一方、オオニシとベラージョンの研究における、ある場面を長く見ることが乳児の誤信念理解を指し示している、という前提は、期待背反法に全面的に依拠している。だが、期待背反法を成立させている、予期に反するものをより長く見るという乳児の性質が、誤信念理解にも該当するかどうかについては、彼女らは考察していない。

正しい場所を見るということが、何らの論証もなく誤信念理解の指標となりえるなら、誤信念理解の指標とみなせる反応は、見ることだけでは限らない

ことになる。ある巧妙な実験方法が考案されるなら、誤信念理解を指し示していると整合的に解釈可能な、見ることよりもより目立ちにくい生体反応が認められるかもしれない。しかも、その反応さえも、最も幼い子どもによってなされている誤信念理解の指標とみなすことはできない。それよりも一層巧妙な実験方法が考案される可能性は原理的に常に開かれているし、そもそもどのような実験によっても読み取れない反応さえあるかもしれない。発達心理学者が読み取れないからといって、誤信念理解の指標となる反応がないとみなすことはできない。したがって、いかに幼い乳児についても⁵⁾、彼ら・彼女らが誤信念理解を行っていないと決定することは原理的に不可能なことになるのである。

このような問題が生じるのも、発達心理学では、誤信念理解を何かの指標によって指し示しうるものと無条件かつ素朴にみなされているからである。この点についてももう少し検討してみよう。

②信念とは何か

誤信念課題が測定しようとしている誤信念理解とは、誤信念課題研究の出発点で定式化されたとおり、「信念についての信念」である。より日常的な言い方をすれば、「他者が・・・と思っている、と私は思っている」という心的状態が、誤信念課題の測定対象である。したがって、ある事象を見ることなし長く見ることが被験者の誤信念理解を指し示しているとすると、それらは、「と思っている」とか「と信じている」という被験者の信念を指し示していなければならないことになる。

では、見ることや長く見ることが信念を指し示している、とはいかなることだろうか。それが、「と思っている」ないし「と信じている」を指し示している、という時、指し示される場所の「と思っている」「と信じている」は、一体どのような「思っている」「信じている」なのだろうか。見ることが誤信念理解を指し示しているとみなすのならば、これらの問いに答えることができないなければならない。しかも問題はより複雑である。誤信念課題研究の「発展」がもたらした知見に従うなら、「信念についての信念」は、「自分自身の信念についての被験者の信念」をも意味する。それゆえ、見ることは、「私は・・・と思っていると思っている」という被験者の信念をも指し示していなければならないはずである。

先ほどみたように、クレメンツとパーナーは、実

験者の質問に対し被験者がある場所を「正しく」見ること、潜在的な誤信念理解とみなしている。この見方に従うなら、見ることが指し示しているのは、潜在的な信念、つまり、潜在的に「・・・と思っている」「信じている」ことである、と答えられることになる。だがこの答えは問いの先延ばしでしかない。見ることによって指し示される「潜在的に思っている」、とはいかなることなのだろうか。今度はこの新たな問いに答えなければならない。しかもこの問いは、一層微妙な問題を掘り起こす。一体、自分が「・・・と思っている」ということがそう思っている人に顕在的になっていない場合、それを「思っている」と称することはできるのであるか。それは当人にとってはむしろ「思っていない」に等しいのではないか。「潜在的」と限定するにせよ、それを「思っている」といえるためには、それが、顕在的に「思っている」こととどのような点で同じく「思っている」ことになるのか。こうした点も説明することができなければならない。

注意が必要なのは、クレメンツらのいう「潜在的に思っている」とは、いわゆる何となく思っている、とか、ぼんやりと思っている、ということではありえない、ということである。なぜなら、標準的誤信念課題に通過できない4歳未満の子どもも、2歳11ヶ月以上の子どもはそのほとんどがクレメンツらの改変版誤信念課題には通過するからである。つまり、「潜在的に」は、「顕在的に」ないし「明確に」思っているのに比べて、いわゆる精度の落ちた状態で「思っている」ことを意味しているわけではない。思っている精度は高いのだが、顕在的に明確に思っているのとは全く違った仕方である。では、潜在的で非判断的でありながら精度を保っている信念とは、いかなる信念なのであるか。

こうした厄介な問題を恐らく意図せぬところで回避すべく、クレメンツとパーナーは、改変版誤信念課題に被験者を通過させるものを、潜在的な信念、とではなく、I-3-②でみたように、潜在的な知識、ないし、非判断的な知識、としている。このような置き換えを行うのも、後者は「暗黙知」というよく知られた概念にも通じるように、「潜在的に知っている」という心的状態は、「潜在的に思っている」という心的状態よりも、はるかに理解しやすいものに思われるためだろう。

しかしながら、知識と信念、知っていることと思っていること・信じていることとは、全く違う心

的狀態である。このことは、誤信念課題研究者自身が明言しているし⁶⁾、そもそも、I-2でみたように、誤信念課題研究を開始させた根本的な動機は、知識とは異なりそれまで着目されてこなかった信念について、発達的に研究することであつたはずである。だからこそ、誤信念課題研究の出発点に置かれた定式は「信念についての信念」であつて、「信念についての知識」ではないのである⁷⁾。

誤信念課題の考案者たちは、信念と知識の違いにこのように気付きながら、一方ではそれに頓着しない。誤信念課題の出発点にある論文「信念についての信念」でも、被験者の信念の問題を知識の問題に帰着させている表現が散見される⁸⁾。しかし、誤信念課題の原型を提示したデネットは、被験者の信念を問題にすることが課題成立の絶対要件であることを明言していた⁹⁾。ヴィマーとパーナーは、誤信念課題考案に際してデネットの提言に全面的に依拠しているのに、この要件の意味を十分に理解していないと考えられる。

そもそも、信念は、「心」の理解に迫るための観点である。当然、「心」の理解は、「心」の能力であり、誤信念課題は、その能力を測る「リトマス試験紙」とみなされているわけである。そうである以上、信念についての被験者の信念を、信念についての被験者の知識に置き換えてしまったなら、被験者の「心」の能力を問題にしていることにはならなくなってしまふ。

信念とは何か。この問いが等閑に付されたまま誤信念課題研究がなされているところに、問題の根源がある。それに対する答えが曖昧だからこそ、誤信念課題研究者は、正当にも知識と信念とを区別しながら、誤信念理解を結局知識の問題に帰着させてしまふことになる、と考えられる。

II サルトルの信念論

誤信念課題研究における以上の問題点を踏まえて、信念とは何かを明らかにしていく。そのためには、以下の二つの条件が求められる。まず、信念を他の何かに還元せず、あくまで信念の特性に即して信念とは何かを明らかにすること、一方で、信念を単なる一つの心的状態とみなさず、その考察が、人間の「心」そのものの解明と直結するものであること、この二つである。この条件を二つ共に満たしうるものに、サルトルの信念論がある。

信念についてのサルトルの考察は、彼の主著『存

在と無』で展開される意識論の一翼を担っている。サルトルによると、意識は、認識に還元されるものではなく、反省以前の意識に基礎づけられている。同じことであるが、意識は、「意識についての意識」という形式を備えている。サルトル意識論の特徴はこのように素描されるが、その後者は、誤信念課題の根本形式「信念についての信念」と同型であり¹⁰⁾、前者は、誤信念課題の「発展史」が辿り着いた地点である、ということを見て取ることができよう。このことから、サルトルが、誤信念課題研究者と共通ないし類縁する視点をもって、誤信念課題研究が等閑にしている信念の特性を明らかにしていることが確認される。

彼の意識論の概要を掴むところからはじめよう。

1 意識について

①非定立的・非措定的意識

「あらゆる意識は、何ものかについての意識 (conscience de quelque chose) である」(p.17;24頁)¹¹⁾。サルトル意識論の出発点は、現象学のこの根本テーゼ、意識の志向性である。例えば、私の意識は、テーブルについての意識である。あるいは、私の意識は、他者の信念についての意識である。「・・・について」という仕方で諸対象に向かう「定立的な (positionnel)」意識は「認識 (connaissance)」である (p.18;25頁)。むしろ、「あらゆる意識が認識であるわけではない (例えば感情的な意識もある) が、あらゆる認識する意識 (conscience connaissante) は、自己の対象についての認識でしかありえない」(p.18;25頁)。

このことを確認したうえでサルトルが強調するのは、「対象を認識する意識は自己自身についての意識 (conscience d'elle-même) でもある」(p.18;25頁)、ということである。このように考える必要があるのも、「もしも、私の意識が、テーブルについての意識であることについての意識でないならば、私の意識はこのテーブルについての意識ではあるが、それについての意識であることについての意識はもたないことになり、私の意識はいってみれば、自己自身を知らない (signorer soi-même) 意識、すなわち、無意識的な (inconscient) 意識である、ということになってしまう」(p.18;25-26頁) からである。つまり、対象についての私の意識が、その意識についての意識でもなければ、それは対象についての意識ではありえても、それが他ならぬ私の意識であることが私の意識にいわば知られなくなってしまふ、ということである。

すると問題となるのは、「こうした意識についての意識 (conscience de conscience) とは何であるか」(p.18:26頁), ということである。

まず押さえておくべきは、これを、「反省 (reflection), つまり、意識についての定立的意識, さらに言い換えれば、意識についての認識 (connaissance de conscience)」(p.18:26頁), とみなすことはできない, ということである。つまり、自分の意識を振り返って反省的に捉え、明晰に認識することが、「意識についての意識」であるのではない。もしも意識についての意識が意識についての認識であるなら、最初の意識は、それを定立的に認識している意識があり、その認識対象となることによって、はじめて私の意識と認められることになる。ところが、最初の意識をそのように認識している意識がやはり私の意識と認められるためには、それを認識対象としている意識, つまり、意識についての意識についての意識, が求められることになる。すると、その意識がやはり私の意識と認められるためには、意識についての意識についての意識についての意識が求められ、以下同様の問題が生じる。かくして、「意識を認識に還元する」(p.18:26頁) なら、「現象の全体が認識されないものに陥る, つまり、我々は、自己及び最後の項についての一つの非意識的な反省に常に突き当たることになってしまうか、さもなければ、[意識についての意識についての意識…といった] 無限後退の必要性を承認する」(pp.18-19:27頁) しかなくなってしまう。「我々が無限後退を避けようと思うなら、自己についての意識は、自己から自己への直接的で非認知的な関係 (rapport immédiat et non-cognitif) である, としなければならぬ」(p.19:27頁)。

このように、意識についての意識が、認識ないし定立的意識ではない意識であることを明示するため、サルトルは、これを「非定立的意識 (conscience non positionnelle)」と名づけ、「対象についてのあらゆる定立的意識は、同時に、それ自身についての非定立的意識である」, という (p.19:28頁)。では、非定立的意識とは、いかなる意識であるのか。サルトルはこれを、「私がケースの中にある煙草を数える」(p.19:28頁) 場合を例に具体的に明らかにしている。私が煙草を「1本・2本・・・12本」と数えている時、私は「いま自分は煙草を数えている」, とことさら思ったり自分に言い聞かせたりする必要はない。「私は、煙草を数えることについての定立的意識を一切もつ必要はない。私は私を『数えている

者として認識している』のではない」(p.19:28頁)。そのような認識は、かえって計算を妨げることにはかならない。このことを確認したうえで、サルトルは次のようにいう。

それにしても、これらの煙草が12本として私に開示される時、私は私の加算活動についての非措定的意識 (conscience non-thétique) をもっている。事実、もしも誰かが私に『あなたはそこで何をしているのですか』と尋ねるなら、私は直ちに『数えているのです』と答えるであろう。そして、この答えは、反省によって私が到達できる瞬間的な意識を目指しているだけではなく、反省されることなく過ごされてきた意識, すぐ前の (immédiat) 私の過去において決して反省されないままであった意識をも目指している。それゆえ、反省には、反省される意識に対するいかなる類の優位性も認められない。つまり、反省される意識を意識自身に対して明らかにしているのは、反省ではない。全く反対に、非反省的意識 (conscience non-réflexive)こそ、反省を可能ならしめているのである。(p.19:28-29頁)

サルトルはここで、非定立的意識を、非措定的意識や非反省的意識と言い換えているが、いずれにせよこうした意識が、反省を可能にする。「あなたは何をしているのか」という質問に答えることは反省によってなされるが、この反省がめざしているのは私によって反省されることなく過ごされてきた意識, つまり、私についての非反省的意識である。私についての非反省的意識があるから、私はそれに改めて反省の眼差しを向け、すぐ前の私の過去としてそれを定立することができる。したがって、常識が前提することとは異なり、反省が反省される意識を、つまり、すぐ前の私の過去として定立されることになる意識を明らかにしてくれるのではない。その意識が反省を成立させているのである。

それゆえ、「あなたは何をしているのか」という質問は、私の反省に訴え、すぐ前の私の過去における意識を定立することを求めているだけであり、反省の基底にある非反省的・非措定的意識を問題にするものではない。そしてサルトルによれば、「数えることについての非措定的意識こそ、私の加算活動の条件である」(p.19:29頁)。その限り、この質問は、私の加算活動の条件を問い質すものでもない。

かくのごとく、非措定的意識は措定的意識と峻

別されるが、注意すべきは、前者も意識である点では後者と同様である、ということである。つまり、非措定的意識は対象を定立しないが、だからといって、それはいわば意識の内側に潜んでいる何ものかではなく、やはり志向性という性格を備えた、「何ものかについての意識」なのである。問題となるのは、こうした、「について」という形式を備えつつも、認識ではない、という非定立的意識の性格が捉えにくいことである。この問題は、「について」という表現方法にも起因する、とサルトルはみる (cf.p.20:29-30頁)。そこで彼は、「について」という表現を用いるのは、定立的意識に言及する場合に限定し、非定立的意識に関しては、これを括弧内に入れた「(について) (de)」という表記を用いることにする (cf.p.20:29-30頁)。このことにより、『『自己についての (de soi)』という言い方がなお認識の観念を呼び起こす』(p.20:29頁) 可能性を排除し、同時に、「について」を括弧内に残すことによって、非定立的意識が、「について」という形式を全く失った「無意識的な意識」ではないことも明示しようとしている。

②自己の信念の二区分

以上の考察に基づく、I-3-①で取り上げたゴブニックとアスティングトンの実験結果をより明確に解釈することができる。

既に明らかにしたように、スマーティ課題は、被験者自身の信念を問う質問が可能な誤信念課題である。ゴブニックらは、スマーティの箱を開けて、実はそこには鉛筆が入っていることを3歳児たちに見せた後、「はじめて箱を見た時、中には何が入っているとあなたは思っていた?」と質問する。すると、多くの3歳児が、「鉛筆が入っていると思っていた」と答える。このように回答する3歳児は、確かにゴブニックらが言うように、「すぐ前の自分たちの誤信念を思い出すことができている」(Gopnik,1993,p.7)。

だが、この実験結果は、ゴブニックらの解釈とは異なり、子どもたちが自分自身の誤信念を理解していないことを示しているとは限らない。そもそも、「子どもたちによる自分自身の心的状態 (psychological states) の理解」(ibid.p.6) という時、ゴブニックらがいかなる「理解」を問題にしているのが明確でないため、彼女らがこの実験において子どもたちのどのような能力を測定しているつもりなのか曖昧である。

ゴブニックらの上記の質問は、子どもたちに、箱を開けて中身を見せるすぐ前の自分たちの信念を振り返らせている。サルトルの表現を使うなら、すぐ前の自分の過去における意識を定立すること、一言でいえば反省を求めている。よって、3歳児の多くがゴブニックらの質問に誤答するという実験結果は、子どもたちが自分の信念についての反省に失敗していることを意味しているだけであり、子どもたちが、箱の中身を見せられるすぐ前の過去において、自分たちの信念 (についての) 非措定的意識をもっているかどうかは明らかにしてくれない。被験者に自分の信念についての信念がないことをもって、自分の信念 (についての) 信念もない、とみなすことはできない。

ゴブニックらがいいう「理解」は、あくまで、子どもたちが自分の心的状態を反省すること・定立的に意識することに限定されている。むしろ、これはサルトル意識論に引き付けた言い方であり、理解についての考察において、サルトルがゴブニックらよりも正しいとは限らない。しかし、I-3-②でみたように、誤信念理解に「潜在的理解」を含める研究が登場することにより、ゴブニックらがいいう理解は、現在では誤信念課題研究においても狭すぎるものとなっている。この点で、サルトルの考察は、ゴブニックらのものよりも、誤信念課題の動向をより適切に汲み取りうるものである、といえる。言い換えれば、ゴブニックらによるこの研究の後の研究の「発展」は、信念という心的状態についても、信念についての措定的意識だけでなく、信念 (についての) 非措定的意識を問題としなければならないことを明示している。そこで、以下では、この点に関わるサルトルの記述を検討していくことにしよう。

2 信念 (についての) 意識

①自己との不一致

サルトルは、「意識の存在は完全な適合性 (adéquation plénière) をもって自己自身と一致することがない」(p.110:209頁)、という。これは、意識のいかなる在り方にもいえることだが、例えば、「快樂や喜び」(p.111:212頁)あるいは「苦痛」(p.20:30頁)や怒りなどを考えると容易に理解できる。私は、どれほど強い喜びのなかにあっても、自分が喜んでることを意識している。そうでなければ、後で振り返ってその時自分がどれほど深く喜んでいたかを意識することはできないはずである。同様に、どれほど強い苦痛や快樂のなかにあっても、意識を失っ

てしまわない限り、それらを意識している自分を意識している。私は後になって、その苦痛や快樂がどれほどただならぬものであったかを意識することができる。苦痛や快樂の究極において意識を失ってしまうことは、苦痛や快樂と自己自身との完全な一致が実現されたことになるかもしれないが、その場合には、意識の喪失と合わせて苦痛や快樂自体も消失してしまう。あるいは、怒りにおいても、私は自分が怒っていることを意識せずに怒ることはできない。「我を忘れて怒る」という表現があるが、これは、文字通りには実現しえない状況を言い表すことによって、怒りの強さを強調するものであろう。喜びや苦痛や快樂や怒りを意識している時、私は喜びや苦痛や快樂や怒りのなかに完全にいるわけではない。換言すれば、私の喜びや苦痛や快樂や怒りは、例えばこのテーブルがテーブルであるようには、喜びや苦痛や快樂や怒りであることができない。私の喜びや苦痛や快樂や怒りは、必ず喜びや苦痛や快樂や怒り（についての）非措定的意識を備え、その意識があるために、私はそれらを措定的に意識することができる。

②信念=非信念

サルトルによると、以上のことは、信念についても全く同様に妥当する。「このテーブルについて、私は『それは全く単にこのテーブルである』ということができる。しかし、私の信念 (ma croyance) については、『それは信念である』というだけにとどまるわけにはいかない」(p.110;210頁)。なぜなら、私は何かを信じている時、その信じていること（についての）非措定的意識を必ずもっているからである。「信念は、快樂や喜びと同様、意識される以前には存在することができず、意識はそれらの存在の尺度である」(p.111;212頁)。つまり、「私の信念は、信念（についての）意識である」(p.110;210頁)。

サルトル信念論の要諦は次の一文に明示されている。「私の信念が信念として捉えられるというただそれだけの事実からして、私の信念は、もはや信念でしかない、つまり、私の信念はもはや既に信念ではないのであって、それは乱された (troublé) 信念である」(p.111;210頁)。怒りや快樂の只中にある時に、怒りや快樂を経験している自分に意識を向けることで怒りや快樂が「乱される」、ということは経験的にもわかりやすい。怒っている自分に距離をとり自分が怒りすぎていることを自覚することは、怒りをコントロールする常套手段であろう。この時

の意識のあり方は専ら措定的だが、「私の信念が信念として捉えられる」とサルトルがいう時の「捉えられる」は、非措定的に意識されている、という意味である。重要なのは、措定的意識は非措定的意識によって可能になり、また、非措定的意識も、「(について)」という一種の志向性を備えた意識に他ならないことである。非措定的にせよ措定的にせよ、意識された私の怒りや快樂はいわゆる純粋な正真正銘の怒りや快樂ではない。それと同様、意識された私の信念も、いわゆる純粋な正真正銘の信念ではない。しかも意識されない信念は存在しえない。それゆえ、「あらゆる信念は、十分に信念であることはない」(p.105;200頁)。

サルトルは、「信念は非信念 (non-croyance) になる」(p.105;200頁)とか、「信じることは、信じないことである (croire, c'est ne pas croire)」(p.104;198頁)、といった常識的には背理としか思えない表現でもって、人間存在にとしての信念の実相に迫ろうとする。この実相が端的に表れる場合として、サルトルは友情を信じる場合を例に取り上げている。友人が私に友情をもっていることを私が信じるとは、「そのことをまっ正直に (de bonne foi) 信じる」(p.104;198頁) ことである。自分が信じているものに少しでも疑いを差し挟むなら、それを信じることにはならない。つまり、友人の友情を信じるとは、例えば、親友とて他人だから、本当のところはわからない、とか、彼も人間だから友情がぐらつくこともあるだろう、とか、こちらが友情を捧げているから彼も同じ態度を取るのだから、こちらの出方次第では彼の友情もどうなるかわからない、などと一切疑わないことである。そうした、当然ありうる疑いを一切排除して彼の友情を信じる、ということは、「信頼の衝動に身を任せ、そう信じることを決意し (décider)、この決意にとどまることを決意することである」(p.104;198頁)。このように、信じるということが決意である限り、「信じるとは、自分が信じているということを知っていることである (croire, c'est savoir qu'on croit)」(p.104;199頁)。よって、信じるとは、先ほど列挙したような疑いが、自分の信じる行為から排除されていることを知っていることでもある。なぜなら、さきほどみたように、信じるということはそれらの排除によって成り立つものだからである。そして、それらの疑いを排除しているということは、自分が信じていることについてそれらが十分にありえ、それらの妥当性や可能性を考え出すと、自分が信じることができなくなってしまう

うために、あえて排除していることも知っている、ということである。だから、「自分が信じているということを知っているとは、もはや信じていないことである」。信じるとは、「信じることでしかない (ne que croire)」(p.104;199頁)。つまり、真っ正直に信じているということは、自分が信じている当のものについて十分ありうる疑いを直視しただしたら、そこにとどまり続けられないようなものでしかない。「かくして、信じるとは、もはや信じていないことである、ということになる」(p.104;199頁)。

以上のように、信じることは、常に信じること(についての)意識であり、自分が信じていることを知っているとは、信じていないことであるならば、「信念は、自らの破壊においてしか自らを実現しえない一つの存在であり、自らを否定する (senier) ことによってしか自らに対し自らを現わしえない一つの存在である」(p.104;200頁) ことになる。

サルトルは、以上の例で使われている「知っている」という言葉が、措定的・定立的に知っていることを意味してはいないことに注意を喚起している (cf.p.104;199頁)。「非措定的意識は知 (sovoir) ではない。……それはあらゆる知の根源にある」(p.104;199頁)。これは煙草の数を数える例に即しても明らかにされたことである。「私は煙草を数えている」と相手に告げることや、「煙草は12本ある」と分かりそれを言明することは、自分が煙草を数えていること(についての)非措定的意識があってはじめて可能になる。

③外的相関者をもたない純粋に主観的な決心

もうひとつ、サルトルは信念について重要な注釈を付している。「信念は、外的相関者 (corrélatif extérieur) をもたない純粋に主観的な決心として私に現われる」ために、「『信じる』という言葉は、信念のゆるぎない堅固さを示すのにも(《私の神よ、私はあなたを信じます》)、無力で全く主観的な性格を示すのにも、無差別に (indifféremment) 用いられる語である」(p.104;199頁)。

私の信念が外的相関者をもたないとは、私が信じていること・思っていることが、現実世界で実際に起きていることと対応している必要はない、ということである。むしろ信念の内容が現実と対応関係が付き難い時に、信念はより信念らしくなる。例えば、私が彼女は無罪だと信じることは、彼女が実際に無罪であるかどうかとは無関係であり、むしろ彼女が無罪ではない可能性が高い時に、私は、彼女の有罪

を示す証拠が自分の目にふれることを恐れ、彼女が無罪であることをぎりぎりまで信じようとするであろう。このことは、「外的相関者をもたない純粋に主観的な決心」という私の信念の特性を露呈させることになる。

誤信念課題は、信念のこの特性を成立条件としている。なぜなら、既述のように、現実での実際の状態とは異なる、他者の「心内」で生起している信念を被験者が捉えられるかどうかを試すのが、誤信念課題だからである。

信念は例外なく以上のような性格をもつ。一見、神を信じること、友人の友情を信じること、お菓子の箱にはお菓子が入っていると信じること、これらは全く異なる信念に思える。しかし、私が信念を向けている神、友情、箱の中のお菓子、これらが私には「見えない」点、少なくとも「見えない」とみなされている点では共通している。現実には知覚できない様々なことに我々は自分の信念を差し向ける。「景気は来年には良くなっていると私は信じている。」「冷蔵庫には確か今日の食料が残っているだろうと私は思う。」「彼が言っていることはきっと本当なんだろうと私は信じている。」実際にどうであるのかを、いま確かめようがないこと、まだ確かめていないこと、あえて確かめようとしないことを、私は信じる。それらを確かめてしまったら、私はもはやそれらを信じることができない。このように、信念は実際の状況の確証を含まないため、信念は、いかなるばどのような事態に対しても差し向けることができる。そのため、サルトルのいうように、「信じる (believe,croire)」という語は、神の存在を信じるといういわゆる重い信念から、日本語では軽く「思う」と言うのが適切な信念にまで、無差別に用いられることになるのである。

以上の考察を導き誤信念課題を解釈し、「心」の探求にとってもつその意味を、誤信念課題研究者たちとは異なる観点から明らかにしたい。

III サルトルに基づく誤信念課題の解釈

1 スマートイ課題における乱された信念

誤信念課題研究者は、誤信念の対極に、「正しい信念」(Perner et al.,1989,p.698; Onishi and Baillargeon, 2005, p.256) や「真の信念」(バロン=コーエン, 2002, p.132) を置き、両者を峻別する。だが一見妥当なこの対置は、信念の本質を捉え損なわせる。パーナーが「知識」を「正しい信念」と言

い換え (Perner et al., 1989, p.698), バロン=コーエンが「知識は真の信念」である (バロン=コーエン, 2002, p.132), といっているように, この対置は, I-4-②で指摘した, 信念と知識の混同と根を同じにする誤りである。

実のところ, 「正しい信念」という表現は自家撞着であり, 「誤信念」もまた同様である。II-2-③の考察内容を思い起こそう。信念という「心的状態」は, 現実という「外的相関者」と切り離されており, これが信念の根本特性である。信念の内容は確かに現実に適合していたりいなかったりするが, 信念そのものは, 実際の状況の確証を含まない限りで, 信念でありえる。したがって, もしも信念が「正しい」ないし「誤っている」ならば, それらはもはや信念ではありえない。重要なのは, II-2-③で指摘したように, 信念のこの心的特性を巧みに利用した心理学実験こそ, 誤信念課題に他ならない, ということである。その限り, 誤信念課題研究者は, 信念のこの根本特性をある意味では誰よりもよく理解しているはずである。にもかかわらず, 実験結果の解釈においては, この理解を放擲してしまう。

私の信念はそもそも乱されたものとしてしか存在しえない。サルトルのこの信念規定を, 誤信念課題は忠実に踏まえている。なかでも, 「スマーティ課題」の手順は, この規定を確実に実現するための過程とみなすことができる。スマーティ課題の特徴は, 他者の信念を被験者に問う前に, スマーティの箱を見せて被験者を一旦「だまし」, そこには鉛筆が入っていることを知らせておくことである。この「だまし」の目的は, I-3-①で述べたように, 被験者と他者とで, 出来事の成り行きに対する常識に基づく予想を同じにしておくことである。ここでの常識とは, 「スマーティの箱にはスマーティが入っている」というものである。この常識をもつ被験者を「だます」ことで, 自分がこの常識をもっており, この常識に従って箱の中身を信じていたことを被験者に浮き彫りにしうる。このことにより, 他者もまたこの常識をもっており, この常識に従って箱の中身を信じている, ということが被験者に明確となる。これが誤信念課題研究者の見込みである。

だが, このような見込みにはどのような前提があるのだろうか。この「だまし」が以上の目的を果たすとするなら, それはなぜなのだろうか。

この「だまし」は, 「スマーティの箱にはスマーティが入っている」という被験者の常識を揺さぶり, 混乱させることをねらいとしている。事実, こ

の課題に関しては, 箱の中身を見せられた子どもたちの驚きが着目されている (cf. キーナン他, 2006, 132頁)。「スマーティの箱に鉛筆が入っている!」と子どもたちを驚かす実験者の意図は, 「スマーティの箱にはスマーティが入っている」という常識がこの場合には誤っていたこと, つまり, それが自分の信念でしかなかったことを子どもたちに了解させることである。実験の手順が示すように, 実験者は, 「スマーティの箱にはスマーティが入っている」という通常成立している事態をわざわざ人為的に打ち壊し, それを被験者の信念として立ち現われさせようとしている。ここで問題となっているのは, まさしくサルトルのいう意味での信念である。信念は信念でしかない。信念は, 自己の破壊や否定においてしか, 自己を現わしえない。信念のこの破壊と立ち現われとは, 厳密に一体である。それゆえ, 「だまし」が最も効果的に機能するなら, いわば常識と信念とがない交ぜになって, いまだ「…と思う」という形をとっていなかった「スマーティの箱にはスマーティが入っている」という心的状態は, 信念というくっきりした輪郭をもつ心的状態として被験者のなかに立ち現われることになる。「スマーティの箱にはスマーティが入っている」をわざわざ誤りとして否定しなければならないのは, そもそも否定されていない・乱されていない信念は, 信念として存在しないからである。このように, 「スマーティ課題」における「だまし」は, 信念とは乱されたものだという信念の根本特性を被験者に際立たせ, この課題を間違いなく信念を問題とする課題たらしめる仕掛けである, といえる。

この「だまし」が, スマーティ課題の設定を非常に「不自然」なものにしている, ということにも着目しておきたい。例えばマクシ課題では, 物の移動が自然なものとなるよう, 極めて慎重にストーリーが組み立てられていた。それに対し, この課題では, お菓子の箱に鉛筆が入っているという「不自然」な事態が, 何の説明もなく被験者に突きつけられる。課題考案者には恐らく意図されていないことだが, この「不自然さ」は, 私の信念が私の信念でしかないことに被験者を否定なく向き合わせる条件である。言い換えれば, この「不自然さ」を「不自然」と受けとめられる被験者が, この課題に通過することになる。このことは, おとなの場合を考えてみるとより明確になる。というのも, おとなにとってはこの質問自体が「不自然」だからである。おとなであれば, 「わざわざ『何が入っていると思うか』

と聞いてくるのだから、その箱にはきっとお菓子が入っているわけではないのだろうな」などと思い、他の物を想像するのが「自然」であろう。質問の「不自然さ」をこのように受けとめることにより、その箱にはお菓子が入っているという信念は、私の信念でしかないことが直ちに了解される。この質問は、信念を乱された信念として、他ならぬ私の信念として私に強く立ち現われさせることになるのである。

「だまし」が信念の根本特性を前提にしていることは、「だまし」が以上のように機能しない場合を考えても明らかとなる。この「だまし」によって、被験者は、例えば、「スマーティの箱には鉛筆が入っていることもある」とか、「スマーティの箱にはスマーティが入っていないこともある」と「正しく」思うようになるとは限らない。「スマーティの箱にはスマーティが入っている」という常識＝知識に、「スマーティの箱には鉛筆が入っている」という新たな知識が単に付け加わる場合もある。この場合には、「スマーティの箱にはスマーティが入っている」という常識は「だまし」によってあまり影響を受けない。サルトル的にいえば、それは十分に乱されることがない。結果として、「スマーティの箱にはスマーティが入っていると自分は信じていた」ことが被験者に立ち現れてこない。ゴブニックらの実験における多くの3歳児たちは、このような状態にいる、と解釈できる。そのために、箱の中身は何であるかと思っていたか、という実験者の質問に対し、子どもたちは、付加された知識に基づいて、「鉛筆」と答えるのである。

2 非信念の現実化としての誤信念課題

「信念についての信念」を明らかにするのに、心理学者はなぜ「正しい信念」ではなく、わざわざ「誤信念」を問題にするのか。この問いは、「誤信念」と呼ばれているものを、以上の考察に従って、乱された信念と置き換えるなら、回答は容易だろう。すなわち、乱された信念の理解は、「正しい信念」理解の対極にあるものではない。そもそも「正しい信念」など存在しない。乱された信念の理解が、信念理解そのものであり、それ以外の信念理解はありえない、ということである。

スマーティ課題に限らず、誤信念課題はすべて、私の信念は信念でしかなく、乱された信念としてしか存在しえないことを被験者が了解しているかを問題にしている。

誤信念課題のストーリーを思い起こそう。マクシ

課題にせよサリー・アン課題にせよ、ストーリー上のポイントは、主人公がある場所に入れておいた物が、主人公の知らない間に移される、という点である。「誤信念」といったものはストーリーのどこにも現われていない。主人公の信念は、「正しい信念」から「誤信念」に移行などしていない。ストーリーにおいて変化しているのは、主人公の信念を取り巻く現実であり、主人公の信念そのものは一貫して変わっていない。実際、課題における変化や移行に被験者が着目してしまうと、主人公の信念ではなく、チョコレートやビー玉がいま現実にあるところに注意が向き、課題通過が妨げられることになる。この課題で被験者が捉えるべきなのは、周囲の現実の変化にもかかわらず、主人公の信念に揺るぎがないこと、言い換えれば、主人公の信念が、周囲の現実の確証を含まない、信念でしかない、ということである。

信念に揺るぎがないのは、それが現実と突き合せられていないからであり、現実と突き合せられていないということは突き合せてみるとどうなるかわからない、ということである。この「どうなるかわからない」ということを確実に含みこんでいることが、信念という心的状態が成立する条件である。II-2-③でも述べたように、これはいかなる種類の信念にも該当する。彼女は有罪かもしれないから、私は彼女の無罪を信じる。私は彼女が無罪であることを知っていないから、彼女の無罪を信じることができる。私の揺るぎない信念は、信念対象に対する不信でもある。同様に、自分が入れた棚にはチョコレートがないかもしれないから、そこにチョコレートがあると私は信じることができる。チョコレートが棚の中にあって「見えない」ことは、棚の中にチョコレートがあることを知覚すること、あるいは知っていることを不可能にし、そのことを信じることを可能にしてくれる。このことは、信じることが、信じている当の内容が否定される可能性に大きく開かれた心的状態であることを明示している。

このように、信念対象に対する私の不信や非信念は、信念という心的状態の成立にとって、必要不可欠である。私は、スマーティの箱にスマーティが入っていることへの非信念をもっているから、スマーティの箱にスマーティが入っていることを信じることができる。同様に、私は、棚やカゴに自分が入れておいた物が入っていることへの非信念をもっているから、そこに自分が入れておいた物が入っていることを信じることができる。

誤信念課題は、私の信念に必ず潜在しているこれらの非信念を、スマーティの箱に鉛筆を入れておく、という仕方である。あるいは、主人公が入れたとは違う場所にチョコレートやビー玉が入っているようにストーリーを展開する、という仕方である。具体化・現実化して被験者に提示する。課題通過のためには、被験者はこの現実化を、潜在的非信念の形に戻して主人公の信念に置き直すことができなければならない。誤信念課題は、例えばスマーティの箱に鉛筆ではなく、定規を入れておこうが野菜スティックを入れておこうが課題として成立するが、そうであるのも、それらは潜在している非信念の現実化であり、その限りでのみ、それらは主人公の信念に関わっているからである。被験者に問われているのは、具体化・現実化された内容にとらわれずに、それらを主人公の信念に潜在する非信念に戻しうるかどうかである。これらの非信念が現実化されたままであると、被験者にとって、「箱にビー玉がある」とか「スマーティの箱に鉛筆がある」ということは一つの知識と意味づけられ、結果として被験者は課題に失敗してしまうのである。

3 「心」と否定

以上、我々は、誤信念課題研究では曖昧である信念という心的状態を明確に規定し、これに基づき、誤信念課題を、被験者における信念＝非信念の了解を問うものと位置づけた。

ここで確認しておくべきは、誤信念課題は、被験者における「心」の理解能力に迫ろうとするものである、という点である。一方、サルトルにおいても、信念という心的あり方は、「心」の、サルトルの文脈でいうと、意識の典型とみなされている。すると、信じることは信じないことである、という一見常識に反する信念規定は、「心」そのものの規定にも妥当し、むしろ、信念規定は「心」の規定の典型に他ならない、ということになる。すなわち、「…ない」という否定が、信念をはじめとする「心」を私に立ち現われさせる。人間の「心」の成立と発達にとって、「…ない」や「非」といった存在様式は、決定的な意味と役割をもっている。「心」の研究や発達研究では全くといっていいほど着目されていないことだが、これまでの考察を踏まえるなら、こうしたことが示唆されることになる。

サルトルは、意識の存在を、「それがいないところのものであり、それがあるところのものでない存在 (être qui est ce qu'il n'est pas et qui n'est pas

ce qu'il est)」（p.98;187頁）、と定義している。これは、「それがあるところのものである (être ce qu'il est)」（p.32;54頁）という存在の仕方をしている物と対照された定義である。物は古びたり新しく生み出されたりするが、いつも空間のある一定の場所を占めて、「それがあるところのもの」として、そこにある。一方、信念は物のように人間の「心」のなかにあるのではない。つまり、信念はそれがあるところのものではない。信念には必ず否定が含まれ、それを非信念という形で捉えずには、信念理解に至ることがない。Ⅲ-2で我々が明らかにしたのはこのことである。

誤信念課題は、子どもによる「心」の理解能力の確かさを測定しようとしているが、ここまでの考察によれば、その確かさは、「…ない」という否定が子どもの「心」に現われることによって、はじめて獲得されるものである。その限り、「心」の発達は、確かさを得る一方で、肯定的で確固たるものを失っていく過程でもあることになる。サルトルの表現を使えば、「心」の発達は、「心」が乱されていく過程を必ず含んでいるはずである。信念に関する本論の研究結果を、「心」の機能全体に対して無造作に一般化することはもちろんできない。だが、「心」や「心」の発達を研究するうえで、我々が信念規定において浮き彫りにした「…ない」や「非」という観点が重要な意義と可能性をもっていることは、これまでの考察から指摘できるのではないだろうか。

4 新しい誤信念課題の問題

では、誤信念課題の「発展史」は、この「…ない」や「非」という否定をよりよく捉えようの方向に向かっているのであろうか。本論の最後ではこの問いを検討し、新しい誤信念課題研究は先行する研究の問題の解消を目指しつつ、より深いところにある問題を掘り起こすことになっている、ということをも明らかにしたい。

①知覚と信念

I-4で明らかにしたように、見ることを指標とする新しい誤信念課題では、被験者がある場所を見ること、ないし長く見ることをもって、被験者が信念理解をしているものとみなされている。つまり、知覚が信念を指し示している、とみなされている。このような課題が考案されたのは、信念理解を、明確な認知や表象の能力ないし判断能力だけに還元しないためである。物事を明確に表象・認知し判断す

ることは、ある物事を他のものから区別して主題化することであり、サルトルに即していうなら、ある対象を定立し、それに対して反省的な意識を向けることである。ところで、「ない」ものは主題化できない。乱されたものは定立できない。「ない」や乱されたものの主題化や定立は、それらを「ある」ものに、乱されていないものにしてしまう。信念における「…ない」や「非」は、主題化や定立からは逃れていく。その限り、既存の誤信念課題だけでは信念理解に十分迫りえないのは確かである。では、「心」における認知や判断という「高次」能力の代わりに、知覚という「低次」能力を持ち出すことで、その不十分さは克服されることになるのだろうか。

信念は、視線であれ言葉であれ、何かの指標でテーブルを指し示すのと同じようには、指し示すことができない。「テーブルを見てください」「テーブルを指差してください」と誰かに頼むのと同様の仕方、「信念を見てください」「信念を指差してください」と頼むことはできない。ある指標が信念を指し示しようとみなした瞬間、信念は主題化され、それは、「信念であるところのもの」になる。信念=非信念は、指標を介して、信念=信念になる。

したがって、信念を知覚によって指し示すことができるかと素朴に思うことは、信念を物的な信念とみなしているということである。こうした問題に、誤信念課題研究者は無頓着である。I-4-②で指摘した、信念とは何かという問いの考察が不十分であるという問題は、信念を物のようなものとみなすことに何の疑問も覚えない、という問題でもあるだろう。

指し示される信念が物的な信念ではなく、現実の信念であるためには、信念を指し示す指標が、物を指し示すようないわゆる外的な指標ではなく、信念における「ない」や「非」をも指し示しうるものでなければならない。この限りでのみ、我々は、ある場所を「正しく」見ること、ないしある場面を長く見ることをもって、被験者に誤信念理解がなされた、とみなすことができる。だが一体、見るという知覚は、「…ない」を指し示しうるであろうか。また、指し示しうるとするなら、それはいかなる仕方においてであろうか。これらの問いは、知覚とはそもそも何か、という問いを考察せずには解答できない。この問いへの取り組みは、本論の目的を超えるものであるが、少なくともここでいえることは、新しい誤信念課題は、古典的誤信念課題の問題点と引き換えに、こうした、一層難解ともいえる新たな問

いを提起している、ということである。このように、誤信念課題の「発展」は、信念から知覚へと問いを拡散させ、信念以外の「心」の領域から信念理解を再考する必要性を浮き彫りにしている。これは、誤信念課題の測定対象から信念理解と無関係な能力を排除しようと腐心してきた研究動向に反する、一種皮肉な結果といわなければならない。

②言語と信念

上記のような問いの拡散は、知覚という領域にだけみられるわけではない。

I-3で述べたように、新しい誤信念課題は、被験者が言語能力をできるだけ行使しないで済むように設計されている。オオニシらが考案した課題はこの究極形態であり、そこでは実験者側も被験者側も言語を一切用いない。課題の遂行に言語能力が必要ないなら、言語能力が未発達な幼児の信念理解も測定可能となる。これが、こうした課題の前提であり、ねらいである。

このねらい通りになるのは、以下のような場合である。ひとつは、被験者は信念を理解しているのに、言語能力が未発達であるために、それを伝えることができない場合、つまり、言語表現能力の未発達が、被験者になされている信念理解を隠してしまう場合である。もうひとつは、言語能力の未発達により、信念理解が問題となる段階に被験者が到達することができない場合、つまり、言語理解能力の未発達が、信念理解を阻害するか不可能にしてしまう場合である。いずれの場合にも、言語能力は、信念理解の伝達や、信念理解への取り組みを可能にする一種の「ツール」とみなされている。だからこそ、その「ツール」の役割を何かが代替してくれるなら、言語は誤信念課題に無くて構わないのであり、むしろ、信念理解やその測定を乱す要因を減らすことができるため、無いほうがより「正しい」信念測定が可能になる、というわけである。

こうした考えにおいては、信念理解能力が言語能力と本質的な関係をもつ、とはみなされていない。この誤信念課題が対象とするのは、いわばそれだけで成り立っている「純粋な」信念理解能力であり、それは言語能力やその他の心的能力とは切り離されている。つまり、言語と信念とは内的関係をもたず、両者は「心」のそれぞれ異なる領域に見出されることになる。

だが、信念についての信念は、言語なくして可能なのか。「…と思うこと」・「…と信じること」は、

言語の支えなくして成立するものだろうか。こうした疑問は、言語なくして思考は可能か、という、言語心理学の古典的問題とも密接に関わってくる。言語なき思考の存在に肯定的な研究者もいるが (cf. ファース, 1982), 思考の成立には何らかの言語の働きを認めるのが一般的であろう。少なくとも、現時点ではこの問題に決定的な解答は与えられていない。同様に、全く言語なきところに信念を認めうるかどうか、議論の余地が多く残されているであろう。もちろん、思考、すなわち「…と考える」ことと、信念とは違う。後者は前者よりもいわばより「低次」の心的能力だろう。だが、言語なき思考は、それがたとえあるにしても、思考のなかでは最も「低次」の心的状態のはずである。だとすると、言語なき思考と信念とは、さほど明確に区別されるものではないのではないだろうか。信念を言語なくして成り立つものと前提するやいなや、このような問題や疑問が浮かび上がることになる。これらは全て、信念とはそもそも何か、という根本的な問いに関わるものである。

言語をいわば異分子として排除し、言葉なきところで信念理解を問題としようとする誤信念課題は、以上の未解決の問題を既決の前提とすることによって成り立っている。新しい誤信念課題は、信念理解能力により厳密に迫ろうとして実験方法を工夫することにより、かえって、学問的にいまだ確立されていない観点を紛れ込ませてしまっている。その限り、整合的に解釈されているようにみえるその実験結果も、根本にある基盤の曖昧さのために、別様に解釈される可能性を残し続ける。この曖昧さを払底しようとするなら、信念理解の「周辺」にある心的能力、上記の場合なら言語能力を問題とし、それと信念理解との関連性を問い直す必要がある。我々はここにも、信念という考察対象へ視点を絞り込めば絞り込むほど、問いが拡大・拡散し、心理学以外の学問領域でも古くから論じられてきた主題が競り上がってくる事態を認めることになるのである。

おわりに

信念は、人間に特有で、いわば人間を人間らしくする心的状態である¹²⁾。その一方、それは現実と相關しないという点では掴みどころがなく、相手の信念にも自分の信念にも絶対的な確信はもてず、だからこそ極めて「人間臭い」ものともなる。このような性格の心的状態に、誤信念課題は、比較的シンプ

ルな実験デザインによって、実証的に迫る道筋を切り拓いた。さらに、考案者たち自身に意図されているわけではないが、この課題は、「非」や「ない」という、実証的研究では取り上げるのが極めて困難な存在様式にアプローチするものともなっている。

一方で、誤信念課題研究が「発展」すればするほど、「バージョンアップ」された課題は我々を信念へとより接近させてくれるようであり、かえって信念の背景に広がる問題群を照らし出すことになった。信念に閉じたままの研究は、その方法がどれほど精緻なものとなっても、これまでを超える成果を生み出したり、未解決の問題を克服することにはなりえないだろう。信念=非信念という信念の特性は、「非」を考察する必要性を示しているだけでなく、信念に限定した研究を原理的に拒否し、信念ならぬものを考察することが信念そのものの考察であるという逆説をも提起している、といえる。そしてこれは「心」にもいえることではないだろうか。「心」なるものの領域を最初から取り囲んで研究することは、絶えず「ない」や「非」を媒介に生成し発達していくその本性を取り逃がすことになってしまうであろう。

このことは、これまで専ら哲学の分野で研究されてきた、「否定」や「無」や「非存在」といった観点が、「心」の研究を行ううえで必要不可欠であることを示している。このことはまた、「心」の研究と既に緊密な結びつきのある分析哲学的「心の哲学」に比べ、交流が不活発であった現象学、特にその存在論が、「心」の解明に重要な貢献をなしていることを意味している¹³⁾。

今後の重要な課題としては、本論の考察を踏まえ、モジュール説の再検討とも絡めながら、「心の理論」を見直すことである。これまで、「心の理論」に定位して誤信念課題を批判的に検討する研究はなされている¹⁴⁾。後者は前者の「リトマス試験紙」であることに鑑みれば、この方向性も当然だろう。だが、誤信念課題の再解釈を介して「心の理論」の正当性や位置づけを問い直すこと、誤信念課題に定位して「心の理論」を批判的に検討することも、可能であり、重要なのではないだろうか。本論の考察はその礎となるはずである。

もうひとつ、誤信念課題がパラダイム転換をもたらした自閉症研究にとって、「ない」や「非」という観点がいかなる意味をもちうるのか、このことも、今後の検討事項としたい。

【註】

- 1) 「心の理論」については、千住 (2012), バロン=コーエン (2002), 子安 (2000), を参照。
- 2) プレマックらが、「心」の「理解」ではなく「理論」という言葉を用いる理由には、「心」は直接見ることができないということ以外に、「心」について何らかの「理論」があると、それを使って人の「行動」を予測できるようになる、ということもある (cf.Premack and Woodruff,1978)。
- 3) 「心の理論」研究批判の代表としては、ピーター・ホブソンの論考がある (cf.ホブソン,2000)。哲学的現象学からの批判的考察として、Zahavi and Parnas (2003) を挙げておきたい。
- 4) 被験者の知識と被験者の信念とを明確に区別する必要性については、I-4-②を参照。
- 5) オオニシらの研究に触発されたある研究では、7ヶ月の乳児にも誤信念理解の萌芽がみられるという主張がなされている (cf.Kovács et al.2010)。
- 6) 例えば、バロン=コーエンは、「正常児にとっては、『知る』ということの理解は信念の理解よりも容易である」(バロン=コーエン,2002,132頁), といっている。また、パーナーは、自閉症児にとって、誤信念の理解と知識の理解とでは、後者のほうが容易であることを述べている (cf.,Perner et al. 1989)
- 7) 既に述べたように、誤信念課題は霊長類研究が契機となって考案されたが、近年の霊長類研究によると、チンパンジーは、他個体の知識は理解しているが、他個体の信念は理解していない、と考えられている (cf.,Kaminski et al.,2008)。この知見も、知識と信念との大きな違いを示唆している。
- 8) 例えば、子どもが場所を指差して課題に回答する利点を、「他者の信念についての自分の知識を言語化する必要がない」(Wimmer and Perner, 1983, p.106) といったり、課題に失敗する子どもは、「自分自身の知識と登場人物の誤信念との区別がまだ確かになっていない」(ibid.,p.107), といったりすることが、その典型である。
- 9) デネットは、課題の成立最低要件を以下のように記述している。
 - 1 Cは、Eがpを信じていると信じている (believe)。
 - 2 Cは、Eがpを欲していると信じている。
 - 3 Cは、(1)と(2)における自分の信念 (beliefs) から、Eがxを行うことになるであろうと推量し、そのためEがxを行うことの先をいこうとする。
 - 4 Cはyを行う、なぜならば
 - 5 Cは、もしもEがxを行うならば、その場合にはCがyを行わない限り、自分が望むものを得ることができないだろうと、もしくは、避けたいと思っているものを得ることになるだろう、と信じているからである。」(Dennett, 1978,p.569)
- 10) これは、誤信念課題の「発展」を踏まえた「自分自身の信念についての被験者の信念」という意味での「信念についての信念」である。
- 11) 『存在と無』からの引用は、頁数だけでその箇所を示す。原典頁数をp.17のように示した後に、邦訳書の頁数も24頁のように併記する。邦訳書からは多大な恩恵に与ったが、筆者なりの理解を明らかにするため、訳文は新たに訳出した。
- 12) 註7を参照。
- 13) サルトル現象学に基づく、否定の観点からの「心」の研究の具体例としては、福田 (2013) を参照。
- 14) 代表例としては、Bloom and German (2000) が挙げられる。

【引用文献】

- Baron-Cohen, S. 1989 "The autistic child's theory of mind: a case of specific development delay," *Journal of Child Psychology and Psychiatry* vol.30 (2) pp.285-297
- バロン=コーエン, S. 2002 『自閉症とマインド・ブラインドネス』(長野敬他訳) 青土社
- Baron-Cohen, S. et al. 1985 "Does the autistic child have a 'theory of mind'?", *Cognition* vol.21 pp.37-46
- Bloom, P. and German, T. 2000 "Two reasons to abandon the false belief task as a test of theory of mind," *Cognition* vol.77 pp.B25-B31
- Clements, W. A. and Perner, J. 1994 "Implicit understanding of belief," *Cognitive Development* vol.9 pp.377-395
- Dennett, D. 1978 "Beliefs about beliefs (Commentary / Cognition and consciousness in nonhuman species)," *Behavioral and Brain Sciences* vol.1(4) pp.568-570

- ファース, H. G. 1982 『言語なき思考—聾の心理学的内含』 (梁山教潤・氏家洋子訳) 誠信書房
- Frith, U. and Happé, F. 1999 "Theory of mind and self-consciousness: what is it like to be autistic?," *Mind & Language* vol.14 pp.1-22
- 福田学2013 「サルトルと神経科学—『否定』を問題とする脳機能研究についての現象学的考察—」 『学ぶと教えるの現象学研究』 15巻 71-104頁
- Gopnik, A. 1993 "How we know our minds: The illusion of first-person knowledge of intentionality," *Behavioral and Brain Sciences* vol.16(1) pp.1-14
- Gopnik, A. and Astington, J. W. 1988 "Children's understanding of representational change and its relation to the understanding of false belief and the appearance-reality distinction," *Child Development* vol.59 pp.26-37
- Happé, F. 1995 "The role of age and verbal ability in the theory of mind task performance of subjects with autism," *Child Development* vol.66 pp.843-855
- ホブソン, P. 2000 『自閉症と心の発達—「心の理論」を越えて—』 (木下孝司監訳) 学苑社
- Kaminski, J. et al. 2008 "Chimpanzees know what others know, but not what they believe," *Cognition* vol.109 pp.224-234
- キーナン, J. P.他2006 『うぬぼれる脳—「鏡の中の顔」と自己意識—』 (山下篤子訳) 日本放送出版協会
- Kovács, Á. M. et al. 2010 "The social sense: Susceptibility to others' beliefs in human infants and adults," *Science* vol.330 (6012) pp.1830-1834
- 子安増生2000 『心の理論—心を読む心の科学—』 岩波書店
- Onishi, K. and Baillargeon, R. 2005 "Do 15-month-old infants understand false beliefs?," *Science* vol.308 (5719) pp.255-258
- Perner, J. et al. 1987 "Three-year-olds' difficulty with false belief: The case for a conceptual deficit," *British Journal of Developmental Psychology* vol.5 pp.125-137
- Perner, J. et al. 1989 "Exploration of the autistic child's theory of mind: knowledge, belief, and communication," *Child Development* vol.60 pp.689-700
- Perner, J. and Ruffman, T. 2005 "Infants' insight into the mind: How deep?," *Science* vol.308 (5719) pp.214-216
- Premack, D. and Woodruff, G. 1978 "Dose the chimpanzee have a theory of mind?," *Behavioral and Brain Sciences* vol.1(4) pp.515-526
- Sartre, J.-P. 1976 *L'être et le néant: Essai d'ontologie phénoménologique*, Gallimard 『存在と無—現象学的存在論の試み—』 (I) (松浪信三郎訳) 人文書院
- 千住淳2012 『社会脳の発達』 東京大学出版会
- Senju, A. et al. 2011 "Do 18-month-olds really attribute mental states to others?: A critical test," *Psychological Science* vol.22 pp.878-880
- Southgate, V. et al. 2007 "Action anticipation through attribution of false belief by 2-year-olds," *Psychological Science* vol.18(7) pp.587-592
- Wellman, H. et al. 2001 "Meta-analysis of theory-of-mind development: The truth about false belief," *Child Development* vol.72(3) pp.655-684
- Wimmer, H. and Perner, J. 1983 "Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception," *Cognition* vol.13 pp.103-128
- Zahavi, D. and Parnas, J. 2003 "Conceptual problems in infantile autism research: Why cognitive science needs phenomenology," *Journal of consciousness studies* vol.10 (9-10) pp.53-71